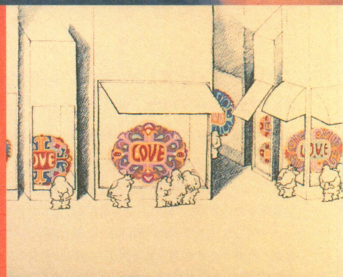
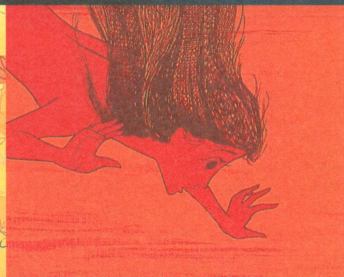
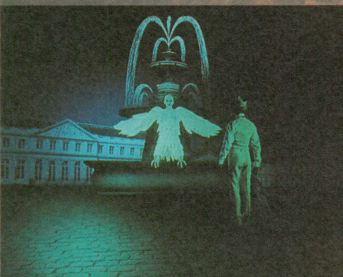




**Raoul Servais**  
A Master of  
Belgian Animation

# NACHTVLINDERS



Papillons de Nuit Hommage A Paul Delvaux  
Een Film van Raoul Servais

『夜の蝶』～ラウル・セルヴェの世界～

HARPYA 9min/1979/カラー/スタンダード

CHROMOPHOBIA 10min/1966/カラー/スタンダード

SIRENE 9min30/1968/カラー/スタンダード

TO SPEAK OR NOT TO SPEAK 11min/1970/カラー/スタンダード

NACHTVLINDERS 8min/1998/カラー/ビスタ



TRANS CONTINENTS

世界のアニメーション界において、その影響力と存在意義ははかりしれない“ベルギー・アニメーションの父”ラウル・セルヴェ。

カンヌ国際映画祭パルムドールを始め、ほぼ全ての作品が様々な受賞歴を持つ程彼の作品はオリジナリティに溢れ、優れたヴィジュアルセンスと批判的精神を兼ね備えた作家である。常に新しい技法を追い求め、挑戦し続ける偉大なアルチザンでもあるセルヴェ。セルヴェ・グラフィといわれる独自の合成技術による『夜の蝶』(98)の美しさは比類なきもの。ベルギー幻想派の巨匠ポール・デルヴォーにオマージュを捧げた本作の他にも、全てが必見の作品ばかり。1作ごとに作風を変えてきた彼の傑作たちが、満を持しての公開となる。

ラウル・セルヴェの作品は、ポール・デルヴォーやルネ・マグリットを生んだ国らしく、すべて幻想に満ちている。そして人間の心理の深層をえぐって見るものに新しい発見を与える。

— 川本喜八郎 (アニメーション作家、日本アニメーション協会(JAA)会長)

私と木下蓮三は、ラウル・セルヴェが今まで見たことのない手法で作ったというその作品によって、その強烈なインパクトに押されてしまいました。ゴングの余韻が消えないうちにKOされてマットに沈んだボクサーの心境、凄い人がいると思いました。

— 木下小夜子 (国際アニメーションフィルム協会(ASIFA)副会長)

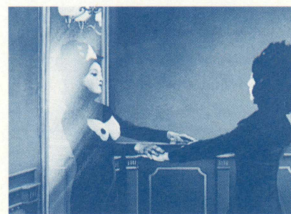
「ナンセンスとは無秩序を生むものではなく、世界を正確に記述するものである」という言葉を思い出しました。

— 明和電機 副社長

私は、ポール・デルヴォーの描く女たちが好きだ。動けないから美しく、動かないから終わりのない静かなエロスを放つ女たち。

そんな幽閉された女たちにセルヴェは息を吹き込んだ。そこで観た事は誰にも言うてはいけない。まるで誰かの夢を覗いたように、脆く危険で美しすぎる世界。

— 緒川たまき



### 『ハーピア』 HARPYA

監督:ラウル・セルヴェ / 脚本:ラウル・セルヴェ / カメラ:ウォルター・スメッツ / 特別効果:ラウル・セルヴェ  
音楽:ルシアン・フッドハルス / キャスト:ウィル・スホール、フラン・ヴァラ・セイバー、シェルト・ヴェイターズ

●カンヌ国際映画祭 短編部門パルムドール(1979)

夜、一人で歩いていると、ミスター・オズカーは強姦を目撃する。彼は被害者を噴水に溺れさせようとした暴漢に打ち勝った。しかし驚いたことに、彼が助けたのはハーピア<女性の頭と鳥の身体を持つ、飢えた不浄の怪物>であった。彼はハーピアに注意を促し、優しさを示した。そして、その神話上の創造物を家に連れて帰り、親切心から泊めてしまう。しかしハーピアは、餌を食べるという獣の本能を剥き出しにする。その食欲は限りなく、オズカーまでもがその餌食になってしまふ。飢えたハーピアに足を切り取られたオズカーは、逃げることを強られるのだが…。

### 『クロモフォビア』 CHROMOPHOBIA

監督:ラウル・セルヴェ / 脚本:ラウル・セルヴェ / 音楽:ラルフ・ダルボ / 製作:ラウル・セルヴェ

●ベルギー映画アニメーション映画祭 最優秀賞(1966)

自由、幸福、そして楽しげな社会にその独裁的なルールを押し付けようとする軍隊の企みを、色をモチーフに表現し、キュートなヴィジュアルに反骨精神を埋め込んだ傑作。カラフルで美しかった街に、真っ黒で全体主義的な軍隊がやってきた。彼等が通り過ぎると全ての色が消えていき、暗黒のファシズムが世界を支配する。しかし、一人の小さな少女が1本の赤い花から道化師テルアレンス・ピーゲルを育てると、素敵なレジスタンスが始まり…。自由と色鮮やかな世界を取り戻すために必要なものは、ほんの小さなきっかけだった。『イエロー・サブマリン』より3年早く、この上なく可愛い作品に仕上がっている。



### 『人魚』 SIRENE

監督:ラウル・セルヴェ / 脚本:ラウル・セルヴェ / 音楽:ルシアン・フッドハルス  
製作:ラウル・セルヴェ / アニメーション:ウィリー・ヴァルズヒルデ

●フィラデルフィア国際映画祭 最優秀賞(1970)

巨大で攻撃的な生きるクレーンと、翼のある太古の動物が空高く舞う不安で恐ろしい時代錯誤的な港。この港で唯一生き永らえている漁師は、ある時不思議なものを見る。それは、沖合に停泊している船に乗った少年の首の首に誘われるように現れた、美しい人魚だった。その存在を知ったクレーンは我先に人魚を釣り上げようとし、不覚にも捕まってしまうと地面に打ち付けられ、死んでしまう。漁師は慌てて警察に連絡をするが、時既に遅し。しかしひとたび少年が笛を奏すると、命を吹き込まれたかのように人魚のシルエットが生を受け、少年と共に旅立ってゆく。それは夢なのか、それとも現実か。救いと自由への希望を運んでくれる、ファンタジックなドラマ。

### 『語るべきか、あるいは語らざるべきか』 TO SPEAK OR NOT TO SPEAK

監督:ラウル・セルヴェ / 脚本:ラウル・セルヴェ / 音楽:ルシアン・フッドハルス / 製作:ラウル・セルヴェ

●アムシー国際アニメーションフェスティバル 特別賞(1971)

当時の世相を反映し、サイケデリックな中に言葉が溢れるメッセージの強い風刺アニメーション。風船のように浮かび上がる言葉の連続。それはまるでファニーな吹き出しに見える。通りにいる男がインタビューを受け、はつきりしないあいまいな返事をする、風船のように浮かび上がる言葉も何が書かれているのかわからなくなる。しかし、小柄なヒッピーが思いのままにストレートな返事をする、風船の中の言葉はカラフルに彩られるのだ。とはいえ、彼の素直な感情表現は、最悪なことに全体主義者の権力によって隠蔽されてしまう。唯一分別のあることの証は「NO!」と叫ぶ勇気を見つけることである。

### 『夜の蝶』 NACHTVLINDERS

脚本:ラウル・セルヴェ / 音楽:ボース・バンク / 製作:アンネ・デグリーゼ / アニメーション:ジョエル・セルヴェ  
キャスト:ヨー・ルッツ、トレス・ボンテ、エリーゼ・デ・ブリーゲル、ヴァレリー・シャミシ、ニコ・コンスタンティニディス

●アムシー国際アニメーションフェスティバル グランプリ(1998)

駅待ち合い室にひらひらと舞う夜の蝶。それはポール・デルヴォーの絵のモチーフとなった場所であり、そのたおやかな揺らぎが人々を誘い込む。そこには、全く身動きをしない二人の淑女が座っていた。彼女たちは、夜行列車が到着するほんの2〜3分前に命を吹き返す。この作品は待つという感情の描写を、デルヴォーの様式を引用することによって生まれる潜在感、奇妙な時間という概念を考えさせる。言葉では表現できない物事の穏やかな誘発を、“セルヴェグラフィ”という斬新でありながらも美しい効果を伴う技法によって見事に表現している。

後援:ベルギー王国大使館・フランダース政府代表部、(財)ベルギー・フランドル交流センター、国際アニメーションフィルム協会(ASIFA)、日本アニメーション協会(JAA) / 協力:小西酒造株式会社、全日空、大阪ヨーロッパ映画祭実行委員会、トランス コンチネンツ / 企画協力:プチグラフィック / 配給:吉本興業株式会社 ©Raoul Servais <http://www.fandango.co.jp/raoulservais>

☆2月3日(土)~6日(火)=PM8:40~9:30

☆2月7日(水)~9日(金)

=11:25/12:30/1:35/2:40 / 3:45/4:50/5:55/7:00/8:05/9:10~10:00

☆2月10日(土)~23日(金)=AM11:00/PM9:10~10:00

前売鑑賞券1200円にて好評発売中!!  
(当日一般1400円の処)



ホワイトヒル梅田の広場M-10右とがる南々5分  
町田ミュージアムスクエア  
06-6361-0088 [www.oms.gr.jp](http://www.oms.gr.jp)